

## [講演要旨] 岩木山信仰と領主権力 —硫黄山出火と、その影響—

弘前大学 大学院地域社会研究科 白石 睦 弥

### § 1. はじめに

弘前藩は初代藩主為信から、岩木山信仰と深い関わりを持ってきた。霊山岩木山によって卍字と錫杖を与えられ、盛岡藩からの独立を果たすことができたとする伝説は、岩木山の霊威を自らのものとする、為信のイデオロギー統制とも捉えることができる。同山に対する弘前藩の信仰は代々厚いものがあり、それは、歴代藩主が当時下居宮と呼ばれた岩木山神社と別当寺である百沢寺の維持管理を積極的に行っていたことから読み取れる。四代藩主信政は自ら神式で岩木山に葬られ、このことも岩木山信仰と弘前藩の結びつきを強めた。なお、現在も岩木山信仰圏が津軽領と重複しており、近世期から連綿とその信仰が続いていたことが理解できる。

近世期津軽領において、下居宮を支配管理すること、ひいては岩木山を支配管理することは、弘前藩のひとつの示威行為であり、堂社の建造・再建・修復はステータスシンボルである下居宮を自己の管理下に置いているということを領主・領民ともに再認識するために重要なことであった。

### § 2. 硫黄山出火 —領民への影響—

以上のような信仰の対象である岩木山が、硫黄山出火により青く燃える様子は、弘前城下からも確認でき、領民には動揺が広がった。

一般に災害発生に際して、藩庁が最も警戒するのは人心の動揺と、それにともなう治安の悪化などである。硫黄山の出火も、その事態が知れ渡ると「夫より騒ぎ出し」と記される通り、人々の間には動揺が広がり、弘前の本町などでも煙の立ち上る様子を確認しようと騒ぎになっていたことが、「金木屋日記」に確認できる。

出火の主な原因は火山性の活動であるのだが、その後の延焼は露出している硫黄が燃えている状態であったため、人力でどうにか消火することが可能であった。直接的な被害を受けることのない状況であるにもかかわらず、敢えて危険な消火活動に加わったり、出火の情報を得て動揺する民衆の姿からは、岩木山に対する並々ならぬ関心がうかがえよう。また、消火活動に直接加わらずとも、消火の工夫たちへの賄いを供出したり、出火の顛末を事細かに記しておく豪商金木屋敬之らの行動からも、硫黄山出火が領民にとって、重大な事件であったことをうかがわせる。

### § 3. 弘前藩の祈祷

硫黄山出火への弘前藩の対応は消火作業の主導だけではない。岩木山に関連する種々の現象に対して「祈祷」を行うことも藩の支配する寺社において重要な役務であった。

硫黄山出火をはじめとする岩木山変事の祈祷は、例えば出汗(金剛像などの神体が結露すること)など、他の変事と比較して圧倒的に重大であると捉えられ、同時に国家安全の祈祷が行われていることすらある。つまり、

弘前藩にとって、硫黄山出火は国家的危機に匹敵する非常事態だったのである。なお、同様に国家安全祈祷が行われた災害に、明和津軽地震(1766)がある。

また、寛政12年(1800)と文化4年(1807)の出火について、百沢寺は、硫黄山出火の鎮火と怪我人が無かったことは、藩主の「御威光」によるものだと明言している。藩庁にとっても、別当寺においてすら、岩木山は守護の山であった。藩庁の公式記録にも同様の記述を確認することができ、「御威光」により18日中の鎮火がかなったとしている。当然、実際には藩主の威光により鎮火がかなった訳ではないが、それを誇示することにより藩主の威光を領内に知らしめたのである。

### § 4. おわりに

硫黄山出火の特徴は、他の火山性災害と異なり、領民の尽力と藩主の威光によってコントロールできると考えられていたことである。岩木山が壊滅的な災害を引き起こさず、鎮火に至ったことは、弘前藩の権威を維持する上で大いに役立ったと考えられる。弘前藩において、岩木山に関連する大規模災害が発生しなかったことは、二つの意味で幸運であった。ひとつには、壊滅的ともなりかねない火山性災害への対応を近世期を通じて行わなくても良かったこと。いま一つは、岩木山信仰に裏付けられた自らのイデオロギーや権威を破壊されなかったことである。

また、藩主の威光に関する記述が見られるのは、寛政12年と文化4年の2件の硫黄山出火である。この2件は蝦夷地出兵が行われている最中に発生している。硫黄山出火に対し、同時に国家安全の祈祷が行われていることや、藩主の威光が示されていることから、対外危機という国家的危機に際し、領内の安全について祈祷を行い、藩主の権威を強く打ち出すことで、藩領＝藩国家を領内から鎮守する岩木山と、対外危機から国家を守護する弘前藩という万全の体制を誇示したものと考えられる。下居宮や百沢寺で行われた祈祷は、弘前藩と岩木山が内外の危機から藩領すなわち藩国家を守ることを明示し、それは藩体制の強化にも繋がった。

※本講演要旨は、「岩木山信仰と領主権力—硫黄山出火を中心に—」(2008年、弘前大学大学院地域社会研究科年報、第5号、p156-176)として既に発表した論文の部分要約である。

### 《主要参考文献・史料》

瀧本壽史、1995、弘前藩「御告御用」の基礎的考察、弘前大学國史研究、98号、弘前大学國史研究会。

長谷川成一、1984、近世北奥大名と寺社、日本近世史論叢、上巻、吉川弘文館。

小館衷三、2000、岩木山信仰史、北方新社。

「岩木山嵩硫黄山出火一件」(弘前市立弘前図書館所蔵)

「金木屋日記」(弘前市立弘前図書館所蔵)

「弘前藩庁日記 御国日記」(弘前市立弘前図書館所蔵)